

ガンダムビルドダイバーズ EXTREAM VS

TLS中毒患者

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

GBNが世に羽ばたくその昔、ガンブラを実際に動かして戦うGP Dの他にも、人がモビルスーツを動かして戦うゲームは何種類も存在していた。

戦場の絆、ガンダムオンライン、バトルオペレーション、そしてバーサスシリーズ。

それらはGBNの登場により市場をガンブラに取って代われ、急速に衰退の一途を辿っていった。今ではそれらの市場規模は全盛期の数分の一にまで縮小し、ゲームセンターの筐体は数を減らし、オンラインサービスのサーバーも閉鎖などが相次いでいる。

忘れ去られつつある当時の代名詞を引っ提げ、彼らはGBNの世界を駆け巡る。

そしてここにもまた一人、その世界へと踏み込もうとしている者がいた。

目次

S t a g e 1   1	エクバ民、参戦	1
S t a g e 1   2	エクバ民、参戦	9
S t a g e 1   3	エクバ民、参戦	17
S t a g e 2   1	ウツキー!! アイツは申年!!	25
S t a g e 2   2	ウツキー!! アイツは申年!!	34
S t a g e 2   3	ウツキー!! アイツは申年!!	44
s t a g e 3   1	戦略兵器のすゝめ	52

## Stagel 1 エクバ民、参戦

「あなた達はどうしたいのですか？」

「GBNの歴史に名を遺したある大戦の最中、フォース・アヴァロン側に加盟していたとあるフォースに所属していた少女は、フォースネストの一室にて『保護』されていた銀髪の少女ともう一人、金髪の少女に声を掛ける。

「僕は……僕たちは、この世界にいては、いけない。だから……」

「世界なんてどうでもいいです。私は、あなたの、あなた自身の己の意思が聞きたいのですから」

確かに、これ以上この二人が存在し続ければこの世界はバグが広がり続け、滅んでしまうかもしれない。

それでも、彼女は信じたかった。

ブレイクデカールを無効化し、漆黒の宇宙に羽ばたいた光の翼を。人と手を取り合い、喜びを分かち合ったあの笑顔を。

彼女の、サラが見せたその笑顔は、彼にそう思わせるには十分すぎるほどの輝きに、希望と可能性に満ち溢れていた。今の自分には無い、けれど、いつかは見られるかもしれないその世界。

だから、信じてみよう、と思った。

人間を。この世界を——そして、自分自身を。

「僕は……私は……生き、たいっ!!」

「……その言葉が、聞きたかったのですよ」

そう言っただけで彼女が指を鳴らすと、それを皮切りに戦況が変化した。各部隊内に散開して配置された一部の機体が反転を開始、次々と同軍である筈の機体に攻撃を仕掛け始めたのだ。

コントロールルームからの通信から困惑の声が聞こえたのを聞き届けると、彼女はくるりと振り向き、その背後に控えていた人物に頭を下げる。

「そういう訳です、チャンピオン。これよりフォース、アケノミハシラは寝返ります。どうか、私どもの勝手をお許し下さいませ」

「全く、君と言う子は……」

「あなただっつて結果的には同じような事をしようとした筈ですよ？私とやり方は違ったかもしれませんが」

そう言つて彼女は窓を開け、テラスの外側に自動操縦で浮かんで待機していた愛機の手の平に飛び乗る。禍々しい漆黒の翼を広げながらも、装甲の隙間から除く黄金の機体フレームが神々しささえも感じさせる。相反する二つの要素を纏め上げた、彼女の機体。

そして彼女は宣言通りにビルドダイバーズ側に寝返り、多大な戦果を挙げた。

その光景は、とある少年の目に焼き付く事となる。



GBNが世に羽ばたくその昔、ガンプラを実際に動かして戦うGP Dの他にも、人がモビルスーツを動かして戦うゲームは何種類も存在していた。

戦場の絆、ガンダムオンライン、バトルオペレーション、そしてバーサスシリーズ。

それらはGBNの登場により市場をガンプラに取って代わられ、急速に衰退の一途を辿っていった。今ではそれらの市場規模は全盛期の数分の一にまで縮小し、ゲームセンターの筐体は数を減らし、オンラインサービスのサーバーも閉鎖などが相次いでいる。

そして丁度その頃だろうか。そのGBNに、変わった動きや立ち回りをするダイバーたちが現れたのは。

「今年は何年だあ？」

「ウツキイイイイイイツ!! 今年は申年!! アアアアアアイツ!!」

「ジム・コマンドー」

「事故要因のジ・オ・ストーム」

「ハイチンゲール」

「今までの弱い自分とは、お別れをした!!」

「かわしても僕はリボーンズガンダム!!」

「ドレノルン」

忘れ去られつつある当時の代名詞を引っ提げ、彼らはGBNの世界を駆け巡る。

そしてここにもまた一人、その世界へ踏み込もうとしている者がいた。



「あー……あと少しで10連勝だったんだがなあ……」

「悪い、欲望のカウンターが決まらんかったわ」

紺色の制服を着た二人の学生が、ゲームセンターを後にそんな事を呟いていた。彼らがやっていたのは、全盛期と比べると稼働数が減っているとは言え、一部の派閥には未だ熱狂的なファンがいる2VS2のガンダムゲーム、EXTRM VS2だ。さっきの戦いでは土壇場でカウンターを出すも、それを見切られて撃破、コストゲージを削り切られて敗北したのだ。

「やっぱ無理有るかなあ……天とライトニング」

「でも、天はお前が憧れた人の機体なんだろう？ ガンプラバトルでだけどき」

「まあな」

彼、アマギリ エイジは隣に立つお調子者の友人、ミフネ ソウスケに誘われてその昔少しだけGPDを触ったことがあるのだが、その際にとある大会で見とれた機体こそが、少女の操るアストレイゴールドフレーム天だった。年は自分とそう変わらないくらいで、大人相手にも怯まず戦い抜け、その少女は見事大会を優勝したのだ。

「以来憧れて天に乗ってるけど、上手くやれるのはエクバの時だけなんだよなあ……」

「だから、エクバの時みたいにひたすらミラコロ格闘差し込めばいいんだってば」

そうは言っても、と言いながらジュースを飲み干してゴミ箱に放り込むエイジ。GPDは触った事はあるのだが、その時に壊された天の修復作業に手一杯で、あまりGBNには触れていなかったのだ。

「そう言えば、お前はもう何部に入るのか決めたのか？」

「そういうソースケはどうなんだよ？」

「俺か？ ふふん、聞いて驚け!! 俺が入部を決めたのはなんとあのガン普拉バトル部!! 我らがミハシラ学園は中高一貫校、その中部から所属している有志の情報によれば我が校の模型部はお姉さまから妹系まで美少女揃いと聞く!! これを聞いてこの俺が入らない訳ねえだろうがア!!」

どこからか取り出したメモ帳を片手に熱弁するソースケ。彼は人脈が広く、情報収集はお手の物との事だ(ただし美少女に限る)。それと同時にカバンの中に入っていたガン普拉ケースの蓋が僅かに開き、その中身を覗かせる。ソースケがゲーム中でも使用しているライトニングガンダムフルバーニアンをベースにした機体だ。

「下心見え見えっつーかお前らしいっつーか……部活の登録ってまだ期限まで時間有ったよな？ なら、見学くらい行ってみるか」

「ようし!! 決まりだ!! 善は急げ、いいから今すぐ行くぞお!!」

「ちよ、まだ部室開いてるのかよ!!」

「へーきへーき!! 止まるんじやねえぞお!!」

こうして、エイジはソースケの手によってミハシラ学園高等部に置かれている部室へと強制連行されていった。

エイジの鞆に付けられた小型の日本刀型キーホルダーが、陽光を反射して怪しく光ったような気がした。



GBN内 トリントン基地周辺

「コイツ……速いぞお!!」

「本当に新入生かよ!? 話が違うじゃないか!!」

額に汗を浮かべながら、ジェスタを操るミハシラ学園の男子学生が目ノ端で追いかけるは、穢れの無い純白の機体。両肩や脚部に増設された大型GNバーニアを駆使した圧倒的な機動力は既に並大抵の人物が追えない速度であり、飛んで跳ねては潜り込んでを繰り返して縦横無尽にフィールドを駆け巡る。

「ぐっ!？」

あっという間に懐に入られ、ビームライフルを左利き仕様に調整されたGNソードで両断された。発光する青いカメラアイにまるで睨み付けられたような気分になり、男子学生はヒイツ、と軽い悲鳴を上げる。

その隙を僚機のヤクトドーガが放つファンネルが付け狙うが、分かっていたかのように純白のアヴァランチエクシアは左足で目の前のジェスタを蹴り飛ばすと両肩からGNビームダガーを正面とやや斜め上に身を捻りながら投擲。その二射は正確にファンネルを撃墜する。

「……初狩りするなら、もつとトラップとか用意するべき」

乗り手に合わせて左利き仕様に調整された純白のアヴァランチエクシアこと、アヴァランチ・ブランシェを駆る少女、カンナギ ユキナは棒付きの飴を啜えながらそう口にするも、どこか拍子抜けしていた。

小学校の頃からガンプラバトルを始めて、早三年。遂にガンプラバトル界、すなわちGNで名をはせる強豪校・ミハシラ学園の中等部に入学。自身の学力的には少しばかり不釣り合いな学校ではあったが、なんとか夢を叶えた形だ。

そして、ようやく迎えたミハシラ学園ガンプラバトル部、入部の日。入部届を握ったまま部室を探してうろろうろしていた自分を、親切な先輩方がGNまで連れてきてくれた。

そこまでは良い、問題はその後だ。

入部試験と称して仕掛けられたのは強めのNPCとの連戦の後の3VS1という明らかにこちらが不利な筈の勝負。恐らくは初心者狩りでもして勝利数を稼いだかったのだろう。しかし、相手は彼女の



実力を見誤っていたのか、逆にこちらが押せている状況だった。

自分の憧れていた世界の住民はこの程度の、卑怯な真似をされても自分が圧倒できる程度の実力しかないのか、と。

小学生の部の大会で二年連続優勝経験のある彼女にとって、それはある種の飢えにも近しかった。

「クッソ……こんなガキに、負けてられねえんだよお!!」

しかし、撃破したと思っていたジェガンが起き上がり、バーニアを吹かしながら抜刀したビームサーベルで切りかかってくる。

しかし、二撃、三撃、力任せに振るうビームサーベルが純白の装甲を焼く事は無く、ユキナは「ウザい」と一言呟くと足の裏に仕込んだGNビームダガーで身を捻りながら踵落としを浴びせて黙らせる。

「今だあ!! やつちまええ!!」

しかし、その一撃は囷だった。墜落したコロニーの破片の隙間から姿を現すジェスタとヤクト・ドーガ。ビームライフルとグレネードを撃ちながら接近してくるが、飛び上がってその奇襲を回避。GNソードによる叩き付けを敢行しようとするが、急に機体がバランスを崩した。

(粒子残量警告……っ。こんな時に……)

両肩と両足に増設されたGNバーニアからの粒子放出が弱まり、バーニアによる強引な加速で振り切ることが出来ない。相次ぐ連戦により、機体のエネルギーが底を尽きかけていたのだ。

GNドライブ搭載機なのでコンデンサーにチャージが済めば再び動けるようになるが、その間の性能低下は否めない。

「ガス欠かあ!?! やつちまおうぜ!!」

「これでポイントはいただきだ!!」

襲い来るビームサーベル。今の状態では着地時の硬直を消す手段が無く、初撃でシールド代わりにしたGNソードが弾き飛ばされる。出力が下がって踏ん張りがきかないのだ。

襲い掛かる二振りのビームサーベル。走馬灯の一種か、不思議なほど彼女には遅く見えた。背部からGNブレイドを抜刀しようとするが間に合わないのは分かっている。

収束された凶暴なメガ粒子の輝きが、高エネルギーの粒子の塊が今にも振るわれんとする。

今まで孤高に生きて来たユキナには、当然友達と呼べる人物は一人もない。その友達を、仲間を、きつとこのガンプラバトル部でなら——そう、思っていたのに。

——友達でも、仲間でもない自分を助けに来てくれる人なんて、いない。

そう諦めてブレイドに手を伸ばすのを止めそうになるが、

「こんな、奴らに……っ!!」

忌々しげに呟いた彼女の声をかき消すように振るわれるビームサーベル。

しかし、それが彼女に直撃する事は無かった。自分を焼くはずのメガ粒子の塊が来ない事に首を傾げるが、目の前の二機の様子がおかしい。

まるで何かに遮られているかのように、その動作が阻まれているのだ。サーベルを振るおうとしても、何らかの盾に阻まれている。

『その折れない心に尊敬するよ。俺なら諦めていたかもしれない』

「何だあつ!？」

「ンだ、てめえはよお!？」

「どこ中だオラア!!」

初心者狩りを仕掛けた三人の怒声が響く中、彼女の目の前の景色に靄が走ったかと思うと、徐々にその姿がはつきりとしていった。

黄金に輝く前面に二本突き出た大型のブレードアンテナとアストレイのフレーム。装甲の形状から天がベースだと分かるが、しかし装甲の色は自分とは対照的な深紅で武装は右腕の巨大な腕部と見紛う形状のトリケロス改と背部簡易バックパックのビームサーベル、後は腰の日本刀のみ。まるで未完成形態のようなシンプルさだ。

トリケロス改を振り払って退け、一度体勢を立て直さんと一度後ろに下がる二機。赤いゴールドフレームはユキナのアヴァランチ・ブラ

ンシエが立て直したのを確認すると、鬼の手の様な右腕を向けながら静かに呟く。

「さあ、踊り明かそうか。このテストメントアストレイとな!!」  
神との契約の名を持つ、レッドフレームとはまた別ベクトルの深紅のアストレイ。

右腕の親指と小指に当たる部位に内蔵された小口径ビームライフルを放ちながら、次の瞬間にはまるで霧の中に消えたかの様に姿を消していた。

その少し前

——私立ミハシラ学園。

とある財閥が経営する中高一貫の学園だが、複数の運動場や体育館などの設備の豪華さもさることながら、この学園では昔からガンプラに関する部活動が非常に盛んでもある事で有名だ。運動部も存在しない訳では無いが、圧倒的にガンプラバトル部、またはその関連の部活が多くを占めており、予算を巡った内部抗争も無くは無い。誰が呼んだか『ガンプラバトル界の学戦都市』。

その中をソースケはエイジの腕をつかみながら強引に案内板を見つつ、着実にその歩みをガンプラバトル部の部室へと足を進めていく。勧誘やその他の声がかかるがそれらはソースケが軽くあしらひ、ようやくしてガンプラバトル部の部室へと到着した。

「ちわーっす!! 入部希望者連れてきました〜!! ……あれ?」

しかし、こちらの様子などお構いなしと言った具合に部室前方の大型スクリーンの前に集まって眉をひそめているという異様な光景が広がっていた。

百二十台のパソコンとそこに繋がれたGBN専用デバイスには御構い無しだ。

「またやってるよ、あの先輩たち……ほつんと最低……!!」

「中等部校舎のPC室にGBNデバイス持ち込んでんだろ? そこまでして勝ちが欲しいのかよ……」

「あの新入生の子も、可哀そうに。あんな奴らに目えつけられちゃって、運がないわ」

「けど、その割には押ししているみたいだね。新入生」

エイジを引きずったままソースケはその集団の中に割って入り、事情を聴いた。何でも以前も嚴重注意を食らった先輩たちが懲りずにポイント目当てで新入生狩りを行っていると言うのだ。しかも相手は中等部の女子生徒。彼女の操る純白のアヴァランチエクシアは連戦ミツシヨンの後にも拘らず一機をダウンさせ、目にも止まらぬ速度で飛んで潜ってを繰り返して翻弄しているが、

「あんなペースじゃ、GN粒子が持たなねえぞ……っ!!」

ソースケがそう言った刹那、両肩と脚部から滲み出ていたGN粒子の光が弱くなり、失せた。アヴァランチエクシアは原作でも出撃前にGN粒子を1時間もコンデンサーに貯め込まなければならぬ。少なくとも短時間では先程のように動けるようになる事は無いだろう。ペースが狂い、徐々に押され始める純白のアヴァランチエクシア。「クソツ!! 見てられねえぜ!! こうなったら俺のヴォルテックスガンダムで……アアアアアアアツ!!」

「ど、どうした!?!」

「チクシヨウ……角が折れた……」

ソースケがガンプラケースから取り出したガンプラは、紅白で彩られたライトニングガンダムだ。しかし、精巧なZ系列フェイスを飾る頭部の角が……折れていたのだ。先程砲の隙間から見える程蓋が開いてしまっていたのだ、恐らくはその時に何らかのショックが加わって折れてしまったのだろう。

「クツソオオオオ!! ちょっと修理してくるぜ!!」

「角ぐらい良いじゃねえか、あっても無くても変わらねえだろ」

「コノバカヤロウツ!! コイツの場合はそれでもねえんだよ!! 誰か瞬間接着剤持ってない!?!」

ギャーギャーと騒ぎ立てるソースケのせいで沈鬱だった場の雰囲気が一気に台無しである。その場に居合わせた先輩部員の話によると校舎の反対側にあるビルダールームにならあるとの事だが、どれほどの時間が掛かる事か……

(俺が、ガン普拉バトルを出来ていれば……せめて、ガン普拉があれば……)

ダッシュで部室を飛び出すソースケを見送るや、エイジは不意にカバンから外した日本刀型のキーホルダーを握り締めた。いや、それはキーホルダーと呼ぶにはやや大振りだった。まるで、HGのガン普拉に持たせるべくして作ったと言わんばかりの大きさだ。

ただ見ているしかないのか？ しかし、この刀一本で自分に何が出来る？

その自問自答の答えは突然差し出されたガン普拉が解決した。

手の平に乗っていたのは黄金のフレームと異形の右腕を持つ深紅のアストレイ、その先を辿ると差し出したのは少女だという事が分かった。どこか超然とした雰囲気を纏い、彫りの深い顔立ちに映える長い黒髪を靡かせ、碧眼の瞳でこちらを見据えながら長身の少女は告げる。

「機体が無くてお困りなのでしょう？ でしたら、これを使いなさいな」

「これは……？」

「テストメントアストレイ。まだ未完成品ですが、十分に戦えますよ。力があれば戦えるのでしょうか？」

何故か硬直する先輩部員達を差し置いて、エイジは少し考えた後その機体を手に取り、腰部に握り締めていた日本刀を装着する。アストレイ側にもアタッチメントが付いており、まるで最初から付ける事を想定していたかの様にぴったりと装着できた。

一応レベルで持っていたGBNデバイスを装着し、バイザーを付けて準備は完了。

「ヤチヨ、彼の補佐を」

「分かったよ、アケノ」

ログインする刹那、何か小さい物がダイバーギアの上に飛び乗ったのを感じた。



(このガンプラ、俺の思い通りに動く……っ!!)

バーチャルコックピット内に浮き出たコントロールステック、では無く、その間に浮かんだ六つのボタンと一つのレバー、所謂アーケードコントローラーにて操作をしていたエイジはメインに宛がわれている二連装ビームガンから特射入力でミラージュコロイドを発動、姿を消しながら真横から回り込み、右腕のトリケロスに備えられた鉤爪で切りかかる。ゲームの様に攻撃を当てれば必ず怯む訳では無いので一方的にコンボは差し込めないが、回り込みながら切りつけたその動作はヤクトドーガの装甲を着実に削っていた。

「どう? 君に合わせて調整したアーケードコントローラーの調子は?」

ジャンク屋然の格好をしたエイジの横で初心者同然であるエイジの機体制御の補佐を行っていた少女が告げる。ややおっとりとした雰囲気とは裏腹に橙色の切り詰めて露出度を上げた裾の短い着物を纏い、側頭部に8を模した簪を宛がった金髪の少女だ。

彼女の名はヤチヨ。

かつてGBNの存亡を賭けた戦いの際に発見されたエルダイバーの一人で、今ではこのガンプラの持ち主であるアケノの世話になっているらしい。

エルダイバーはその一軒以来着実に数を増やし、最近ではサルベージ技術も進んでいてその数を増やしている。それでも、現実世界に確認されているのは僅か数百人程度。勿論エイジも初めて見るので、口グインしていつの間にか真横に乗っていた瞬間は大慌てだった。

「細かい補佐は僕がやるから、君はどう動かしたいかをこれで示してほしい」

そう言われて新たにコックピットに出現したアーケードコントローラー型操縦桿を用いて操作するが、機動力の特性などがゲームでも使うゴールドフレーム天とほぼほぼ同じだったので初使用にも拘らず手に馴染んでいた。

「アニキっ!! あのカンプラはまさか……っ!!」

「まさか、あの人がこんな小競り合いに介入してきたとも言えるか? いや、ありえねえ!!」

深紅の機体の強襲に怯むヤクト・ドーガのファイター。機体の完成度は彼らの目からも分かる程高く、あの人と畏怖を込めた呼び方をする人物の作品である事は明らかだった。

しかし、そうであれば自分たちなぞ瞬殺されている。おまけに、先



ほど聞こえてきた声は男のそれだった。つまり、あの人では無い。とは言え、聞き覚えも無い。であれば……

「てめえも新入生って所かあ!? まとめて歓迎してやるぜえ!!」

いくつかの判断材料からそう確信したヤクト・ドーガのダイバーはビームサーベルを背後のテストAMENTアストレイに向けて振るう。しかし、攻撃の動作が見えていたエイジは所謂バクフワと呼ばれる動作で慣性を付けて後ろに下がりながらビームガンを放つ。それと同時に射撃ボタンは押しっぱなし、ある動作に備える。

「ガーベラ・ストレートオツ!! は、こう使う!!」

射撃ボタンを離すと、右腰の鞘に収められていた日本刀を抜刀。しかし、それで切り掛かるのではなく……投げた。

まさか日本刀を投擲されるとは思っておらず反応が遅れるが、投擲されたジェスタは回避こそ叶わなかったがガードが間に合う。しかし、その予想外の重量と切れ味はシールドを貫通し、左腕ごと串刺しにした。

「こいつ!? この刀、本物の軟鉄で出来てやがる!? 金属パーツってそういう事じゃねえぞ!」

ジェスタのダイバーは動かなくなった左腕を盾にビームサーベルに持ち替えて格闘戦を行うが、バルカンをトリケロスに阻まれ、アストレイはシールドの陰からハンドガンを付き出して射撃。よろけを取った後に左腕に刺さった刀を引き抜き、そのまま切り捨てる。シールドごと真つ二つになったジェスタの左腕が、宙を舞った。

「だが、隙は出来た!!」

不思議な動き方をするが、どうにも一定の癖がある。それ故に刀を振り切った後の硬直を狙ってジエスタはビームサーベルを振るうが、その胴体を後ろから何かに貫かれた。鈍色に光るGNソードだ。放置されている間にかダツシユ一回分の粒子がチャージできたユキナが高速で距離を詰め、背後からその胴体に突き立てたのだ。

「撃破確認しないから……こうなる」

「お、俺のポイントがああああつ!!」

断末魔も他所に爆発四散するジエスタ。しかし、悪あがきか粒子を纏っていないせいで切れ味の鈍いGNソードを掴まれ、離脱が遅れたアヴァランチ・ブランシエの左腕を道連れにする。ユキナはジエスタを撃破確認した後、両膝がショートを起こして崩れ落ち膝立ちになった。

「貸し一つ。けど私がやれるのはここまで」

「クソツ!! こつち来るんじゃあない!!」

勝てる筈の勝負が突然の乱入者のせいであらゆる全てが狂ってしまった。楽にポイントを手に入る筈だったのに、予想外に強い新入生と、恐らくはあの人の作品を駆る新入生の為に全てがパーだ。ここで負ければ、もう自分に後は無い。だからこそ――

「だからって、大の男が女の子苛めちゃダメでしょ!!」

エイジはロックをヤクトドーガに向け、トリケロスを盾に今度は日本刀を構えながら斜めに軸をずらしつつ急速接近、ヴァイダール横特格をそのまま再現した形だが、思いの外様になっている。

耐久性の高いトリケロスはシールドメガ粒子砲を防ぎ切り、そのまま胴体に向けて日本刀を振りかぶる。

片手でそんな使い方をしよう物ならガンプラ側に負担が掛かって

もおかしくないが、すくい上げる様にしたその一撃は機体を両断するのでは無く打ち上げた。先端は尖っていてあの貫通力だったにも拘らず、伝わって来たのはまるで鈍器のような破壊力。

「まさか、研無刀——」

「今だよ、エイジ」

「穿て!!」

打ち上げた後に相応しい攻撃は決まっている。すかさずトリケロスを展開、手の平後方に備えられていた空洞にランサーダートを装填、そのまま右手を打ち上げられたヤクトドーガに向けると、目にも止まらぬ速度で射出されたランサーダートが機体の中央を貫き、胸部装甲を突き破って内部まで侵攻したダートが爆発を起こし、それと連鎖するようにヤクトドーガは爆発四散する。

「こ、降参する……」

《——BATTLE ENDED!!》

仲間二人を失い、恐慌状態に陥ったジエガンのパイロットが降参する事によって、戦闘終了を告げるシステム音声 flowed。

(こんな人も……いるんだ……)

コックピットハッチから出てきて初勝利の余韻に呆然とするジャンク屋衣装の少年と、こちらに向けて手を振る金髪のエルダイバー。彼女の目から見れば、エイジの動き自体はまだどこか稚拙で、変な癖がある。けれども、どうであれ自分の為にこの場に駆け付けて来たこのダイバーの事を、少し気に留めようと思ったのであった。

——遠い記憶

『ぼ、僕のガンプラ……』

ゲームセンターから出て来た少年は、各部が破損したアストレイを眺めて愕然としていた。彼が今しがた挑戦していたのはGPDと呼ばれる実際にガンプラを動かして戦うもので、当然実際にガンプラを動かすことから破損も起こりうる。先程試合に負けた彼の手の中には、相手の持つ日本刀で両断された右腕と破壊された頭部、そして傷だらけの本体が握られていた。

友達に勧められてやっでは見たのだが、自分には彼のように上手くは出来なかった。

このアストレイは親に手伝って貰いながらではあるが、そこそこの手間暇かけて作ったガンプラ故に愛着がある。

損壊具合からもう自分の腕では元通りに戻せないと分かり、少年は階段にうずくまった。

『大の男の子が泣くんじゃありません!!』

そう言っただけ彼の顔を持ち上げた少女がいた。年は自分とそう変わらないか少し上ぐらいの、白いワンピースを着た黒髪と碧眼が綺麗な少女だ。

その少女も腰にガンプラを持ち運ぶ用のケースを身に着けており、ファイターの一人であることが分かる。

『だって……っ、僕のガンプラが……』

『メソメソ泣いている暇があるのならバトルの腕を磨きなさいな!!  
あなたもファイターの端くれなのでしょ!』

『僕は君みたいに本気でやっっている訳じゃない!!  
ただ、面白そうだからやってみただけなのに……っ!!』

意気込みの差から起きた食い違い。片やプロを目指すべくして英才教育を施された文字通りのプロの卵。そしてもう一人は一般通過民間人。そのレベルの差がこの二人にはあった。

子供の喧嘩に倫理性などは無い。ただお互いの主張をぶつけるだけの稚拙な口喧嘩。

『——お嬢様、どうなされたのですか?』

そこに割り込んできたのは、この炎天下の真夏の空の下で汗一つ掻かずに黒のスーツを着こなす老紳士だった。

お嬢様と呼ばれた白いワンピースの少女はその老紳士に状況を説明するが、状況を聞き終えると彼は「成る程」と呟き、

『それはお嬢様が悪いですね』

『何故のですか!?!』

『人は皆、貴方と同じような考えで生きている訳では無いのです。人の意思は十人十色、それはサイコフレームの輝きの様に虹色でなければならぬ物なのです。こう言った方が、お嬢様には分かりやすいでしょう?』

ガンダムネタを交えた老紳士の言葉にワンピースの少女はある程度クールダウンしたのか、老紳士のその言葉を聞き届けると頭を振り、少年に手を差し伸べる。

『貸しなさい、そのガンプラを』

『え?…でも……』

『私なりのケジメです。そのガンプラを最高の状態に直して差し上げましょう。イオリ・セイもびっくりの出来にして差し上げますわ』  
少し迷った後に、少年はボロボロになったアストレイを彼女に差し出した。彼女はそれを老紳士がどこから取り出したソフトケースの中に保管すると、代わりにHGのガンプラサイズの鞆に納められた日本刀を少年に差し出す。

『これは?』

『それを肌身離さず身に付けておきなさい。修理を終えたら、私がそれを目印にして貴方にガンプラを返しますから』

少女がそう言うと、老紳士が彼女をやんわりと急かし、彼女はいつの間にか近くには止まっていた黒塗りの高級車の中にへと姿を消した。

以来、少年はその少女と出会う事は無かったが、それでも少年はその日本刀を持ち続けた。



「あの一年生、アケノ様のガンプラとは言え本当に勝っちゃまいやがった……っ!!」

「しかも何あの動き？ 凄い癖のある動きだけど」

「これはうちのリーダーに報告しなくちゃ……っ!!」

「そのような事を口に出している場合ですか!? 愚か者!!」

モニターの前で固唾を呑んで見守っていた部員たちは口々に呟くが、アケノはその部員達を一喝した。先程エイジにガンプラを手渡した時の女神の様な微笑みはどこへやら、一瞬にして鬼の形相となったアケノは肩と黒髪を怒らせながら続ける。

「あなた方もこのミハシラ学園に來た以上、ここが『ガンプラバトル界の学戦都市』と呼ばれている所以は知っているでしょう？ どのような条件であれ、勝負に負けて各自所有のポイントが無くなれば、部屋はおろか最悪部活動の参加すら出来なくなるのですよ？ そのような事を、まだ入部も定かではない新入生に味合わせようと言うのですか?」

「し、しかしアケノ様……アイツらあれでも結構強くて、僕たちの腕じゃ逆に返り討ちと言うか……」

「そ、そうですね!! それにあの娘、結構強かったから私たち居なくても大丈夫かなーって……」

「メソメソ弱音と言い訳を吐いている暇があるのなら腕を磨きなさいな。あなた方もファイターの一人なのではないでしょうか?」

アケノはそう言い張ると踵を返し、未だパソコンの前に釘付けになっているエイジと、そのデバイスの傍で膝をついたエルダイバーであるヤチヨのボディに視線を向け、ポツリと呟く。

「とは言え、人の思いは千差万別。目指す志が同じでもその強さには違いがあります。私の考えを押し付けるだけでは……駄目なのでしようけれども」

その直後、パソコンの画面に変化が生じ、エイジとヤチヨが現実世

界に帰って来た。ヘッドギアを外すと、エイジはテストメントアストレイをアケノに差し出した。

「あの、ありがとう、ございました!! お陰であの新生の子を助けられました」

「こちらこそありがとうございます。後の処理は既に向かっている先生方が何とかしてくれるでしょう。それと、お礼と言う訳ではありませんが、そのガンプラなら差し上げますわ。と言うよりは……お返し致しますわ」

その衝撃の発言に、部員一同といつの間にも帰って来ていたソースケまでもが思わず口をあぐりと開けた。エイジもその発言には戸惑っており、あたふたとするがそれをフォローするかのよういつの間にかエイジの肩の上に登っていた橙色の着物を着た金髪のエルダイバー、ヤチヨが付け加える。

「エイジ……いや、前回PDFで八位の最年少のゴールドフレーム使い、VGE、と呼んだ方が良いかな?」

「何で、君がその名前を……?」

VGEと言うのは彼がエクストリームバーサス2で名乗っているプレイヤーネームだ。昨年の全国大会ではソースケとはまた別の相手と共に出場し、最年少でその序列八位に名を連ねたのだ。

以前GPDやGBNで見た、やたらと強いゴールドフレーム天に憧れ、それらの代わりにエクバシリーズで使い続けて早数年。気が付けばここまで使える様になってしまったのだ。

「と言うのも、この機体は元々君に合わせて調整してあるんだ。だからあの操作法もスムーズにできたんだよ」

「言われてみれば、プログラミングされている物に妙にどこかで見事ある攻撃モーションが多かったと言うか……」

「その刀……ずっと持っていてくれていたのですね、と言えば思っ出していたでしょう?」

テストメントアストレイの腰に装備されている、エイジが以前からずっと持っていた経年劣化で鞘がボロボロになったガンプラサイズの日日本刀を見つめながら、アケノは懐かしむように告げる。

エイジはそのガンプラ用の刀と彼女をじっくりと見比べて考え込むこと数十秒、ようやく閃いた。

「もしかして、あの時の!？」

「はい。ようやく思い出して頂けました——」

「貴い様あああああああああああああつ!!」

刹那、アケノの言葉を遮ってソースケがエイジの両肩を掴み、嫉妬のあまりブンブンと振り回した。ちなみにヤチヨはいつの間にかアケノの肩に飛び乗って避難している。

「ちよ、ソースケっ!？」

「お前ええええっ!! ミハシラ学園の四天王が一人、フォース、アケノミハシラを率いる『鏡月の剣』のミカガミ アケノ様と知り合いたあどういう事だあ!?! このお方はミハシラ学園昨年度彼女にした生徒ランキング上位入賞にして模試も全国トップレベル、更に更にGPD時代にも当時小学生でいくつかの大会のファイナリストに名を連ねている才色兼備を体現した貴様には勿体無さ過ぎるお方だぞ!! それを機様と言う奴はあ!!」

その間もブンブンとソースケにひたすら体を揺すられ続けるエイジ。ちなみに彼は編入生であるにも関わらず、持ち前のキャラで爆発的に人脈を拡大し、故に美少女限定で情報を集めきると言う偉業を成し遂げており、一部男子生徒からは英雄視されている。振り回されているエイジの気がだんだんと遠くなってきた所で、

「そこまでにしておきなさいな」

ソースケがアケノのデコピンを食らい、パチンツと小気味良い音が部室内に鳴り響く。

それを契機にソースケはエイジを手放すが、同時に恍惚とした表情で両手で額を押さえる。

「うっひよう、アケノさんにデコピンされちゃったぜ!! 俺、今日死んでもいい……」

「さて、自己紹介が遅れました。大方は先程彼が言ってくれた通りです。ミカガミ アケノ、一応ですが四人いるガンプラバトル部の部長の一人を務めさせて頂いています。今後ともお見知りおきを」



「あの時は、自己紹介出来なかったけど……俺、アマギリ エイジです!! 宜しくお願いします!!」

「はい、こちらこそ。先程申し上げた通り、そのガンプラは貴方にお返しします。刀の方も選別だと思ってお受け取り下さい。あとは――」

そこで丁度チャイムが鳴り響いた。現在の時間は午後五時半、部活動の終了を告げるチャイムだ。まだ説明が終わっていないので名残惜しかったが、アケノはそれを耳にすると手を打ち鳴らして部室に残っている他の部員達に退室を促した。

「どうやら、時間のようですね。今日の所はこの辺りにしておきましょう。正式な勧誘と手続きは、また追って後程。この部活には四人の部長がいますから、誰の下に着くかは今すぐ決める必要はありませんよ」

別れ際にそう告げると、アケノはヤチヨを肩に乗せたまま踵を返し、部室の鍵を返すべく職員室へと向かっていった。

「……やべえ、アケノさんも勿論だけど、他のチームも美少女多いんだよなあこの学園!! 『核の女王』<sup>ニュークリア・クイーン</sup>のアマノ先輩に『地這い魔女』<sup>デザート・ウイザード</sup>のクウジヨウ先輩、他にも薙刀部と兼部しているナギサちゃんにそれからそれから――」

「……見つけた」

ソースケがメモ帳を片手に興奮冷め止まぬと言った調子でエイジと並んで歩くと、校門を丁度出た辺りで声を掛けられた。

紺と青をベースにした制服は自分たちの物と同じだが、形が少し違う事から中等部の生徒である事が分かる。

背は低いが、顔立ちは整っており、艶のある空色の髪も相まって人形のような愛くるしきがあるが、目つきがやや鋭くその口には棒付きの飴が加えられている。

「えーと……君は?」

「このガンプラを見れば、分かる?」

そう言って彼女が腰のケースから取り出したのは、純白のアヴァラシエクシアだった。

彼女は先程上級生に襲われていた生徒だったのだ。

ソースケはすぐさまメモ帳をパラパラと捲ると、彼女の項目を見つけたのか興奮気味に読み上げる。

「こ、この娘は中等部一年生のカンナギ ユキナちゃんだ!! ガン普拉バトル部に入部している中では最年少にして小学生大会で二年連続優勝の経験がある、天性の勘だけで戦うスピードスター……っ!!」

「小学生の部二年連続優勝者……」

「赤いアストレイに乗ってたのは、どっち？」

ユキナはガンプラをケースにしまうと、二人に歩み寄り品定めするような目で二人を見定める。

二人の胸の部分までしかない低身長故に自然と上目遣いになり、幾らか気まずい気分になるが、彼女はそんな事には御構い無しに二人を品定めする。

「……こっちの方が」

ユキナはエイジを見定めると、彼に向けて軽く頭を下げた。

「さつきはありがとう。粒子さえ残ってれば、私一人でやれたけど」

「アハハ……けど確かに、途中からしか見ていないけど凄いい操縦技術だった」

「あなたも筋は悪くない。だけど……パターン化された動きを組み合わせているのが、凄いい気になる」

エイジの機体に施されたアケコン制御システムは、ゲームと同じくいくつかの動きをパターン化して入力したものだ。しかし、同じ条件下ならともかく、自由自在に動かせるGBNではそれが通じるのにも限界がある。あの時はヤチヨが細かい制御や防御などを行っていたから良かったが、自在に機体を動かせるようにならないければ、この先は厳しいだろう。

「お礼って訳じゃないけど……見てあげよっか？ ガン普拉バトル」

「俺は……」

エイジがこの学園に来たのは、このガン普拉バトルが盛んな学園で

なら、あの刀の持ち主と出会えるのではないかと考えていたからだ。元の持ち主が持っていた方が良いに決まっていると思っただけだが、まさか本人から受け取り拒否されるとは思っていなかった。

特にガンプラバトルに興味があった訳では無かったのだが……

先輩部員から手渡された腰のガンプラバトルケースを見やる。その中に入っているのは、元々自分の物だったが、彼女が手を加えて出来上がった深紅のアストレイと、彼女に手渡された軟鉄製の刀。それらを見て、

「初めてみるのも、良いかもしれないな」

「後輩の私が言うのも変だけど……ようこそ、ガンプラバトルへ」

そう言って、ユキナから差し出された手を取るエイジ。その光景を見て嫉妬に狂ったソースケは、また彼の両肩を掴んでブンブンと振り回すのであった。

## Stage 2-1 ウツキー!! アイツは申年!!

ミハシラ学園の所有する専用サーバー区画には広大な敷地が用意されている。その大元はコズミック・イラ時代の砂時計型をした新世代コロニーだ。

太陽粒子・宇宙放射線遮断フィールド発生システムを外壁側に有する円錐状構造物の底面に位置する直径10キロ相当の面積が居住区であり、支点となるセンターハブを軸に回転する事で擬似重力を生み出し、地球上とほとんど変わらない環境を確立しており、気候は亜熱帯に近い物に設定されている。側面は元より多層超弾性偏光&自己修復ガラスで覆われているが、そこから更に独自の改良が加えられ、少なくともアグニ数発で致命傷になる様な事は無い。

「~~~~~っ!!」

その中の自然公園地区、MSの全長より大きい木々がそびえ立つこの森林の中に、機体のスピーカーを通じて最早人の物とは思えない叫び声が響き渡る。時刻はまだ昼間だと言うのに森林特有の視界の悪さもあって、その不気味具合は尋常ではない。奇声を上げながら密林を駆け巡る謎のMS。その調査を特殊ミッションとして受け、来たのは良いが、

「ね、ねえ、ナギサちゃん。やつぱり帰ろうよ……」

「何言ってやがる、サトシユウ!! テメエがポイント欲しいっていうからここまで来たんだろうが!! たった敵一体倒すだけで降格危機から昇格モノなんだろ?」

背部に1/550のデンドロビウムのコンテナを装備し、リボルビングランチャー付きのビームライフルを構えたステイメンを操る気弱な少年は、フェダーインライフルを構えて近接戦闘に備える深紅のペイルライダーを操る勝気な少女に柄で小突かれる。

この学園のガンプラバトル部ではGBNが設定したものは別口でランク制度が設けられており、学園側から出されたミッションには難易度に応じて追加ボーナスが入る仕組みとなっている。ランクが上がれば高性能のパソコンが使える部室や道具の揃うビルダー

ムでの活動が許可されるが、一定数の敗北を重ねるなどしてポイントが規定値を下回ると権利を取り上げられ、しまいには事実上の退部にまで追い込まれてしまう。

GBNが競技としてプロ認定されるようになって早数年、この様なランク付けすることで各自の奮起と競争を煽るというのは大きな組織では割とよくある事だったりする。この学園もまた、その大きな組織の一つなのだ。

「ウツキー」

「っ!? 何か聞こえた!! そこかつ!!」

深紅のペイルライダー、ブラスレイター・イザナギは密林戦用に切り詰めた短砲身ガトリングガン音を音の聞こえた九時方向に向けて掃射。秒間数百発と言う暴力的なレートで吐き出される徹甲弾が森林の木々を薙ぎ倒す。続いてサトシユウの駆る重武装型のステイメン・グロリオザが背部のコンテナに収まっていた拡散焼夷ミサイルコンテナを二機射出。MSにダメージを与えるには適しない焼夷弾だが、邪魔な密林を焼き払うのには十分な燃料を積んだ大量の子弹が親機から離れて降り注ぎ、視界内の木々を焼き払う。

「ウツキー」

「ちっ、まだ生きてやがる!!」

「レーダー反応……後ろ!」

しかし、それらの攻撃に手応えは一切なかった。

代わりに事前に頭上に放っていたプロペラ対空式レーダーポッドがようやく敵機の反応を捉える。数は一。しかしこの木々が密生した密林の中を信じられないくらいスピードで駆け巡っている。

「ウツキー!!」

どんどん近づいてくる反応。デブリの宇宙ならともかく、MSが移動するには宇宙よりも障害であろう木々を抜けて三倍以上のスピードで迫ってくる。

ブラスレイターは近接戦闘に備えてフェダーインライフルを持ち替えビーム刃を発振させる。ビームザンバーが組み込まれたそれは、さながら薙刀の様だ。

グロリオーザもシールドを前面に構えてリボルビングランチャーから瞬光式徹甲榴弾をいつでも発射できるように備える。

「ウツキー!!」

木々の隙間から、何かが飛び出して来る。

森林の一部を焼き払った事により視界が開けたため、頭上から差し込むシャフトからの反射光による逆光のせいで相手の正確な姿が視認できない。

ただ見えたのは、赤く光るモノアイと、両手両足に搭載された四本のヒートソードのみ。

「ウツキー!!」

次の瞬間には、目にも止まらぬ連撃により二人の機体が両断されていた。

それが、記録映像の最後だった。

『EXSARU System Stand by……』



「知ってる？ 奇声上げながら森林に出没する悪魔の噂」

「俺も聞いたぜ。あのナギサが瞬殺されたって話だぞ」

「二年の有力候補で駄目とかどんだけ手強いんだよ……そのミッションよく運営の許可が下りたな」

放課後、アケノが率いるフォース『アケノミハシラ』の使用するビルダールームに招かれていたエイジとソースケは、入部届の紙を手にしつつその部室へと向かっていた。

そんな中間こえてくるのは、妙なミッションの噂ばかりである。

「なあ、みんな何の話してんだ？」

「ふーむ、俺もあまり情報は入っていないんだが、何かやばいミッションがガツコ側から配布されたらしいぞ」

「どんな奴が相手なんだか……」

情報通のソースケを持つてしても、その問題のミッションの全容は把握できていないらしい。内容は気になるところだが、今はとりあえ

ず先を急ぎたかったので足早にビルダールームへと足を進める。

扉をノックして開けると、そこには……

「ええ……」

積み重ねられたガンプラの箱で作られた、迷路空間が広がっていた。SDから1/60、大小様々なガンプラの箱や塗料の棚で作り上げられたまるで迷路の様な空間が広がっていたのだ。パツと見ただけでもデンドロビウムやネオジオング、果てはディープストライカーまで確認できる。

「何じゃこりやあ……?」

「えーと……アケノミハシラはこの学園にある四つのフォースの中では最も自由人が多いフォースだ。平常時は各々が好き勝手に動いているイメージがあるけど、いざと言う時の団結力には定評がある……つてとこかな?」

その好き勝手具合がこの部室の惨状に現れていると言うのだろうか。

「あら、ようこそいらつしやいました。こちらにお上がりなさいな」  
奥の方からアケノの声が聞こえて来た。二人がその方向に向けてガンプラの箱の山の間をすり抜けていくと、ようやく広い場所へと辿り付く。

そこでは、何故か畳の上で正座をしながらお茶を啜る黒髪長身の美少女、ミカガミ アケノの姿があった。隣に置かれた膳の上には銀色の狼と、その横で正座している金髪のエルダイバー、ヤチヨの姿が見える。

「……何で茶道?」

「機体の案や戦術を練る際に落ち着ける場所が欲しいと思いついて、丁度隣にあった茶道部の部室と壁を壊して融合させたのがこの部室なんです」

「元茶道部の生徒たちもこの機会にガンプラバトルに興味を持ってくれたからね、かなりの人数が僕たちのフォースに合流しているよ」

「私立校って自由なんだな」

「そう言う事じゃねえと思うぞ……おつ? それがアケノ先輩のガ

ンプラですか？」

ソースケがエイジに突っ込みを入れると、そこでようやく彼女の傍に置かれた膳の上に置かれた桜色の装甲と紫色のフレームを持つ異形のアストレイの姿に気づいた。いや、果たしてこれはMS形態と呼べるのだろうか。

脚部装甲や剥き出しのフレームは確かにアストレイシリーズ特有の物だが、機体の状態が四足歩行形態なのだ。

肩部は後方に突き出たフィン上のパーツと一体化し、その部分は複数の刀剣状のパーツが寄り合わさって出来ている。

背部にはアームで日本刀が装備されており、どう見ても日本刀の用に適さないこの形態でも使用可能のようだ。

咆哮するように口を開いた頭部はまるで狼のようで、四肢の爪状のパーツや尾部の毛飾りの存在もあり、まるで本物の獣の様な風格さえ漂わせる。

「まるで狼みたいですわね」

「アストレイオウカロウ桜花狼、と私は呼んでいます。基本的にはこの形態でいる事が多いですね、私の場合は」

「アストレイはビルダーの数だけ姿を変えるって言うが、まさかミラージュフレームが原形機だとはな……」

「それよりも、その入部届の紙を持っているという事は、本当に私の所で良かったのですか？ 他の三つの部室の方はもう見て回られたのですか？」

「いや、実を言うとですわね……」

ソースケとエイジは既にここに来る前に他の三つの部室も見て回っていたのだ。

その事の顛末は長くなるのでまた別の話。

「——それで、全部を見て回った結果、俺達はここでいいかな  
くって……」

「ふふっ、この学園のフォースは少々風変わりが多いですからね。ですが、加わって頂けると言うのなら幸いです。ようこそ、アケノミハシラへ」



アケノは二人から入部届を快く受理すると、標準的なHGのガンブラと大してサイズが変わらないヤチヨがやや苦勞して持ち上げていた大型のハンコを受け取り、書類に判を押す。

「現実での手続きはこれで終わりです。次はGBN内にて手続きを行いますよう」

そう言つて彼女が立ち上がると、元茶道部側の入り口である扉が開かれた。(この時二人は、現在のアケノミハシラのビルダールーム兼レストルームが元茶道部部室側の扉が正規の入り口である事を知らなかった)入り口から入つて来たのは、二人の少女だった。一人は先日も会つた事がある中等部のカンナギ ユキナ、もう一人は。何やら細長い何かが入つたケースを担いだ勝気な少女だった。ブレザーを腰に巻き、雑に束ねられたポニーテールが本人の活発さを示している。

「おつ、いたいた。ぶちよー、あたしも新入り連れて来たぜ」

「勧誘」苦勞様でした、ナギサ。あら、あなたは確か……」

「あの赤いアストレイ……作つたのは、貴方？」

ユキナは彼女の隣に置いてあるアストレイ桜花狼の造形を見て、一発でテストメントアストレイの作成者を当てて見せた。昼寝とお菓子のつまみ食いが日課の彼女だが、こう言つた感覚の鋭さには目を見張るものがある。

アケノは少し意外そうな表情を浮かべるが、一呼吸置くとすぐさま笑みを浮かべる。

「はい。操縦は彼ですし、彼もヤチヨの補佐があつての事ですけども」

「それでも、あの時は貴方の機体に助けられた。ありがとう……ございます」

不愛想且つタメ口で済まそうとするユキナを彼女の幼馴染であるナギサが小突き、訂正させる。二人は三つも年が離れているが、お互い姉妹の様に認識しているのでこれぐらいの事は日常茶飯事だ。何か武術でも嗜んでいるのか小突きにしては威力があつたらしく、ユキナは突かれた側頭部を押さえる。

「……ちよつと、痛い」

「つたく、初対面のぶちよーぐらいには敬語使いなよ。ユキナももう中学生なんだからさ」

「まあまあ、ナギサさんもその辺りにして。丁度新入部員が集まった事ですし、そろそろGBNに向かいましようか」

アケノが手を打ち鳴らし、ヤチヨを肩に乗せて立ち上がると四人を伴ってパソコンルームへと向かった。



GBN フォース アケノミハシラ管轄下宇宙ステーション 『アケノミハシラ』

「——で、早々に模擬戦とはなあ!!」

着崩した青の学ランを来たソースケは、機体を側転しながら変形させ、更に慣性で進んだ所で変形解除しながらブースターポッドからミサイルを射出して牽制をしつつ着地保護をする。

パツと見はホワイトを中心に赤のアクセントが光るライトニングガンダムの改造機、ヴォルテックスガンダムだが、バックウエポンシステムを中心に各部に手が入れられており、AGE-2の様な翼の形状でありながら、フルバーニアンの様にミサイル内蔵のブースターポッドを持ち、それ単体でも切り離してSFSとして利用できるなど、今までのライトニングBWSの集大成とも呼べるヴォルテックスBWSを持つ。

新入部員同士でのレクリエーションという事でエイジとユキナを含む三人対、部長であるアケノの駆るアストレイ桜花狼との模擬戦を行う事になったのだが、とにかくこちらの攻撃が当たらない。しかも、二人は瞬く間に瞬殺されてしまった。残るは自分一人のみのタイマン勝負。

草原を駆ける銀色の狼は口に咥えたMS用の日本刀を振りかざし、岩場を蹴ってソースケに向かって襲い掛かる。

「食らいやがれ!! 波動裂帛ボム!!」

腰部フロントアーマーに搭載されていたハンドグレネードを投擲、

地面に着弾すると直線状に次々と火柱が発生し、銀狼の装甲を焼く。トライバーニングガンダムが劇中で披露し、ゲームでも要となる技、次元霸王流奥義 波動裂帛拳を使い捨ての手投げ弾として使えるようになった物で、威力こそ本家と遜色ないが腰部フロントアーマーに二発しか携行出来ないのが弱点ではある。

「こいつで少しは……何っ!!」

しかし、アケノはその程度でやられてあげる程お人好しでは無かった。爪の先から一瞬だけ発生する粒子状の足場を駆使してジグザグに動き、雷鳥を今にも食い殺さんと牙を剥く。アストレイ系である故の装甲の低さを、人型の常識を外れた圧倒的な機動力を持って補っているのだ。

「ならこいつはどうだあ!! プラフスキー・パワーゲートオ!!」

ヴォルテックスBWSに搭載された四基のビットが起動し、ビーム刃を展開して正面に円形に配置、プラフスキー粒子の膜を展開させ、主兵装である大型ハイビームライフルを構えてその砲身を開き、最大出力でそこに向けて照射する。

ゲートを潜り抜けたピンク色の照射ビームはそこでさらに増幅され、青白い極太のビームとなって銀狼に降り注ぐ。

「トライファイターズの武装の全部乗せ……面白い機体ですね。ですが——」

刹那、銀狼が口に啞える日本刀の刀身の色が無機質な鈍色から、ソースケの放ったハイバーストモードと同じ青色に変色した。

刀身を体の左側に構えたまま身を捻りつつ一閃、その一撃はビームを切り裂き、プラフスキーパワーゲートを切り裂き、ヴォルテックスガンダムの両腕をも切り裂いていた。即座に身を捻らなければ正面からハイネエエエエエエされる事になっていただろう。

「まだアケノミハシラ首領として、新入部員に後れを取るわけには参りませんので♪」

「っ、つええ……」

三対一で挑んでも、各個撃破に持ち込まれて敵わなかった。圧倒的な技量、そして高いガンプラの完成度。それらが合わさっているから

こそ、四人の部長の中では唯一の二年生にして、この地位に立っている事は伊達では無いと、この身で実感した。

ソースケは自身のメモ帳に追記を加えつつ、切り落とされた両腕を上げてお手上げのポーズをとるのであった。

## Stage 2-2 ウツキー!! アイツは申年!!

GBN内 ミハシラ学園用コロニー・サーバー フォース アケノ  
ミハシラ領地 天守閣

ガン普拉バトルがプロ競技認定されてからミハシラ学園の中では唯一の二年生であるアケノの統率するフォース、アケノミハシラは本的には決まり事などの制約は無く、比較的自由人の集まりである事であるが、前フォースマスターの趣味趣向故にアケノミハシラの領土のシンボルには和風建築が施されており、中でもこの天守閣の存在は圧巻である。自然公園から人工物まで程よく混ざり合った空間全体を見渡せるそこは、他のフォース所属、あるいは一般サーバーに公開解放された際にも絶景スポットの一つとして数えられる。

「どうですか? なかなか良い眺めでしょう?」

「うっひょー!! 流石はサーバー一般公開時の絶景スポットアンケート上位常連の眺めだぜ!!」

「ほつんと、どこからその情報持ってくるんだか……」

コウサカ ユウマが着ていた物と同じモデルの青い詰襟を着崩したソースケを、水色を基調としたエプロンドレスを着たユキナが横目で見つっ、棒付きの飴を咥え直す。

GBN内では現実の容姿が基礎的にはベースとなるが、割と自由にアバターの変えることが出来る。エイジはレンズ型のメカが付いたバンダナを頭に巻き、服装は青のジャケットとジーンズと悪運の強いジャンク屋然としており、アケノは桜の木と狼の刺繍が目を引く所謂和風ドレスを身に纏っており、現実と変わり桜色の髪を風に靡かせ、その身体には獣の耳が、そして尻尾があった。

「さて、三人にはこの度新たに入部して頂いた訳ですが、この学園のガン普拉バトル部の共通のルールと言うものはご存知ですか?」

「えーっと……確か、勝敗で増減するポイント制度……すみません、これぐらいしか……」

「ざっくばらんに言ってしまうばそうです。この部ではランクポイ

ント制度が採用されており、勝ち続ければ昇格して様々な恩恵が得られますが、負け続けると降格し、事実上の退部にまで追い込まれることもあります」

「ま、その辺はエクバとそう変わんねえよ」

「さて、暗い話はこの辺りにしておいて、本題に入りましょうか」アケノがピシヤリと扇子を閉じると、広間の何も無かった筈の床の一部がせり上がり、作戦会議をするための台が出現する。戦術マップに記されたそれは、このコロニー内部の全容が記されており、二回ほど扇子で小突くとその一部を拡大させる。

「手始めに、と言っては何ですが、簡単なミッションをまずは三人に受けて頂きます。内容はこの自然公園の調査です」

「いわゆる偵察ミッション……ってやつ？」

「はい。この自然公園地区は基本的には中立地帯なのですが、最近妙な動きがあると聞きました。今回はその対象の調査となります。バグであれば運営に報告しなければなりませんし、中立を破る者がいれば罰を受けて頂かなければなりませんので」

「こやかな笑顔で言い放つが、要するにルール破りに問答無用、という事である。このサーバー内は基本的には交戦規定により他勢力との勝手な交戦こそ控えられているが、実際にはいつどこで撃墜されるか分かった物では無く、それでいてポイントもきちんと減る。まさに遊びであって、遊びじゃない。」

「とは言え、最初から探索ミッションと言うのはいかにもらしくてエイジやソースケには高評価だった。」

「今回のミッションはあくまで私からのお願いという事で、万が一撃墜されてもポイントの低下は微々たるものです。どうか、気軽にやってきてくださいね」



「ま、間もなく降下予定地点ですう!!」

ミデア級輸送機に揺すられること数分、オペレーターとして派遣さ

れた部員のまだ場慣れしない声を聴き、エイジはテストメントアストレイのコックピットの中で改めて操縦桿を握り締める。

現在ミデアのカーゴに積み込まれているのはテストメントアストレイ、アヴァランチ・ブランシエ、ヴォルテックスガンダム、そしてオペレーターを乗せたホバートトラック一台の小隊編成だ。背部のカーゴハッチが開き、いつでも降下可能な体制となる。

「えーっと、シイナちゃん、だっけ？　もしかしてオペレーター初めて？」

「は、はい!!　中等部三年のニイジマ　シイナ、15歳!!　初オペレーターやります!!」

緊張で声が上がっている新任オペレーター、シイナはビクビクと小動物の様に震えながらも、年齢上は年上であるがキャリア的には新入部員であるソースケの質問に律儀に応答した。心なしか彼女が掛けている黒縁のメガネまでもが緊張でプルプル震えているようにも見える。

「貴方はただ、私たちにルートと状況を教えてくれればそれでいい。余計な事は考えないで」

「で、でも私本当に初めてで、皆さんのご迷惑にならないかどうか……」

最年少である筈のユキナのアドバイスにもどこか不安げに答える彼女。彼女が落ち着き払い過ぎと言うのもあるが、最早どっちが先輩で後輩だか分からない謎の空間が設立している。

丁度その時、ミデア側からの信号を確認。降下ポイントが近づき、機体のロックを外そうとするが――

「っ!?　エイジ、避けて!!」

アケノからお目付け役として派遣され、エイジと同乗していた和装の金髪エルダイバー、ヤチヨが何かに気が付き、回避を促した。続いて鳴り響く照準警報、場所は眼下の密林から。グレネードが3、4発……まだ増える。

迎撃機銃が作動するが、無人制御なのでその精度は大したものでは無く、エンジン部を直撃して爆発が発生、機体が激しく左右に揺れる。

「いきなり攻撃かよ!!」

「おいロック外れねえぞ?! どうなってやがる!」

「そ、それが今の攻撃で制御系にエラーが出たみたいです!! 何とかロック解除してますけど……」

パニックに陥りながらもシイナはコンソールパネルを展開、無人ミデア級の操縦系統にアクセスしてエラーの回復を試みるが、機体の揺れも相まって操作が追いついていない。

それを見かねたユキナが腕部GNバルカンで各機体の物理ロックを強引に破壊し、左利きである彼女用に調整されたGNソードを振るってコンテナを内側から切断、脱出口を切り開いた。

「む、無茶苦茶ですう!!」

「でも助かった!!」

爆発炎上するコンテナから脱出する三機と一両。しかし、降下予定ポイントから大分ズレてしまい、眼下には着地できるような場所が無い。この三機にはナパーム弾のような木々を焼き払える武装が搭載されており、このままでは木々に激突してしまう。いや――

「行くぜえ、ヤチヨ。パワー全開だ!!」

「何をやる気なの?」

「こいつが運動エネルギー弾だってなら、衝撃波くらい起こせるよなあ!!」

何か思いついたエイジが機体下方に向けて、その右手を開いて構えさせた。掌から突き出る鉄杭、ランサーダート。それを電磁加速により超高初速で射出できるトリケロスTを、このままいくと自分たちが落下するであろうポイントに向け、彼が何をしたいかを察したヤチヨがロックを定める。

「穿て!!」

そのままサブ射撃を入力。そのコマンドに割り当てられている攻撃こそ、このランサーダート（電磁誘導射出）であり、フルパワーの専用レールガンで射出されたランサーダートは超高速で眼下の森に着弾。易々とMSの装甲を貫通する必殺の鉄杭は地表着弾時に発生



させ、衝撃波が多数の木々を薙ぎ倒し、その余波は上空にも届く。流石に単発な上に弾頭が小型なので鉄血のオルフェンズ本編の様に大型のクレーターまでは作れなかったが、MS数機が着地するには十分なスペースは作れた。

「無茶苦茶だぜ!!」

「でも……助かった」

エイジのとっさの機転で着地場所を確保した三機はスラストターを吹かして制動を掛け、彼が切り開いた地点に着地する。

それと同時に上空で耐久の限界を超えた無人ミデア級が爆発、ポリゴンの塵にへと姿を変えていくのが見えた。

「そ、想定外のトラブルでしたが、なんとか着地できましたね……はあ、ドキドキしたあ」

「しかし、今のが妙な連中って奴か?」

「……恐らく」

ホバートトラックを地面に降ろすソースケを見届けながら周囲を警戒するエイジ。右腕のトリケロステストメントの電磁加速射出ユニットにシールド裏にマウントされた次弾のランサーダートを装填し、臨戦態勢に入る。元々はハンドガンが入れられていたが、武装が多すぎてもエイジの制御方法では使いきれないと言う判断から取り外され、代わりに小型化したランサーダートを収めている。シールド一面につき三発まで携行できるため、これにより最大七発まで射撃可能になっている。先程撃つたため、残り六発。

「予定座標から大幅にズレてしまっているので、事前に組んだ進行ルートは使えないです。全滅を避けるため、各機散開して予定ルートに戻りましょう」

「了解だ————って言いたいところ悪いけど」

展開していたジエネライト・ドラグーンから何らかの反応を検知したソースケが突然匍匐姿勢になり、Zのハイパーメガランチャーの小型版とも呼べるハイパー・ビームライフルを構え、展開式の砲身とバレットを展開、弾速の早い狙撃弾をその方向に浴びせる。何かにヒット、恐らくは武装だったのか森林の奥から小規模の爆発が発生す

る。

「敵襲だ!! 多分二機以上、森から来やがるぞ!!」

「え? ど、どこですかあ!」

「森林の中はホバーは無理でしょ!! シイナちゃんは一回落がって!!」

増加センサーとプラフスキーパワーゲート発生器を兼ねるジェネレイト・ドラグーンをバックパックに戻し、左腕のバックラーシールドをホバートラックの前に突き立てて即席の遮蔽物とし、膝立ちになつて再び狙撃体勢に入るソースケ。

GNソードを展開するユキナは4時から8時を、トリケロスを構えるエイジが8時から12時を警戒し、360度どの方向から来ても対応できるように構える。

「ウツキー」

ガサガサと鳴り響く周囲の森林、三機に囲まれた中央でアンダーグラウンドソナーを展開していたシイナが、木々の揺れる音に交じつて妙な音を拾う。

「なにこれ……サルの声……?」

「サル?」

「ウツキー」

音声をこちら側にも回してもらおうと、確かにサルの鳴き声に似たそれだった。

「ナギサの言つてた通りだ……」

「サルの声? いや……まさか……」

「ウツキー!!」

迫る獣の叫び声、ざわめく森の木々、しかし360度森林に囲まれたこの場では、どこから攻撃が襲い掛かってくるか分かった物では無い。次第に大きくなっていく声と音。見えない恐怖が襲い掛かり、シイナに至つては今にも泣きそうだった。

「ウツキー!!」

「ああもう!! こなくそおおおおおっ!!」

しびれを切らしたソースケがジェネレイト・ドラグーンを円形に配

置き、プラフスキーパワーゲートを展開。そこに向けてハイパー・ビームライフルを最大出力で照射すると同時に背部のBWSからミサイルを一斉発射する。ゲートを通ったピンク色のメガ粒子は増幅されて極太の青い光線となり、同時に放ったミサイルが周囲の森に向けて上空から拡散、着弾。さらにゲートを制御し、強引に光線の射線を曲げる。全エネルギーを収束させた薙ぎ払い照射は、目の前の森林を焼き尽くす。これがガンダム本編に出てくるような通常のクローニールでは大穴が当然のように開くだろうが、ここは特別調整されたGN内なのでその辺りは気にせず撃てる。そして――

「ウツキー!!」

そのビームを飛び越えるかのように、二機の機影が姿を現した。

ようやくはつきり捉えることが出来たその機体は、イフリート改がベースの改造機だった。カラーリングや武装に大きな変化は見られないが、なんと言っても最大の特徴は脚部を持たず、なんと本来足があるべきはずの場所にもう一対の腕部が装備されているではないか。

「こいつが今回のターゲットだつてかあ!?!」

「で、ですが私たちの任務は原因の探索までですよ!?! ここは先輩たちに任せて私たちは撤退――」

「そうも……言つてられない」

全身に赤い煙の様なオーラを纏う二機のイフリート改に只ならぬ恐怖を感じて撤退を提案するシイナだが、二機のイフリートは地面にヒートソードを突き立てて着地し、こちらを見据えると声にならない、まるで獣のような雄たけびを上げながら両手のヒートソードを振りかざして飛びかかってくる。

「イフリート二機か、なら引き撃ち安定だな!!」

「囨は、私が」

二射目のランサーダートを放つエイジと、シイナのホバートラックが安全な所まで後退したことを確認してから突き刺していたシールドを引き抜き、ハイパー・ビームライフルから牽制射を浴びせるソースケ。二人の援護を受けてユキナが切り込み、二機相手に四肢に搭載されたGNビームサーベルを駆使して強引に切り合いを挑む。しか

し、彼女の四肢には大小含めて同時に使えるのは合計六本、大して相手はMSの胴体など一撃で両断出来そうな切れ味を持つ大振りのヒートソードを各機四本、それが二機で合計八本。

ユキナの驚異的な反射速度を持つてしても全てを防いだ上で反撃できる訳では無く、アヴァランチ・ブランシェの純白の装甲の至る所に切り傷が刻まれる。

「~~~~~っ!!」

「ちよつと、ジツとしてて……っ!!」

イフリート二機の機体外部スピーカーから流れる獣の雄たけびの様な声に苛立ちを覚えたユキナが右腕のGNビームトンファアを起動したまま殴りかかる。

しかし、相手もまたその一撃を驚異的な反射速度で回避し、一度距離を置いてきた。

「二人とも、今」

「ぶち抜くぜっ!!」

着地時の硬直を狙って放たれる高弾速狙撃ビームと三射目の超高初速ランサーダート。標準的な着地硬直ならず刺さるであろう高弾速武装による狙撃。しかし、それすらもイフリートは元脚部側の腕部のヒートソードを手放し、それを足場にして跳躍、着地タイミングをずらされて狙撃武装は空しく空を切る。

「チクショウ!! 何つう反射神経だよ!? 読み合いとかのレベルじゃねーぞこれ!!」

「あの速度……人間業じゃない」

「人間じゃ無い? まさか、実は超強いNPCとかってことですかあ!?!」

「いや、もしかしたら……」

この世界で生まれた存在、エルダイバーであるが故に対峙する二機のイフリートから只ならぬ何かを感じ取っていたヤチヨ。その推論を言い切ろうとする前にエイジが突然前ブーストを吹かし、トリケロSTを盾に構えながらミラージュコロイドで姿を消しつつ急速接近からの軟鉄製日本刀による斬撃を浴びせようとする。

「ちよつと、エイジ!？」

「ヤチヨ!! アイツをロックオンし続けてくれ!!」

指示と同時に姿を現しつつ回り込んでからの強襲、横格闘入力により横薙ぎに振るわれる日本刀、イフリートは当然の様に軽いステップを踏んでそれを避け、あわよくば反撃まで入れてこようとしますが、それはこちらも同じだった。動作が発生し切る前にレバーを素早く二回入力してこちらもステップ、その攻撃をかわし、もう一度横格闘。再びイフリートがそれをかわす、しかしこちらもかわす、もう一度攻撃、その繰り返し。

「横横横横横横横横横横横横!!」

完全脳死選択によるステップからの横格闘の繰り返し。しかし、単純動作故にその入力速度は反射云々に左右されず、ひたすら同じ動作を最速入力で繰り返し返す。GBNにはエクバシリースほどシビアなブーストゲージの概念が無いため、オーバーヒートを気にせず何度でも動作のキャンセルが効く、それ故に可能とした戦法だ。

そして幾度となく振るわれた刀が、ようやくイフリートの胴体を捉えた。硬度に任せた力任せの一撃は装甲にめり込み、すかさず特格派性を入力。トリケロSTの鉤爪で胴体を掴み、それを持ち上げ――

「ぶつとべ!!」

ゼロ距離で放たれるランサーダート。掴み故に防御不能なその一撃はイフリートの腹部装甲を貫通し、腹にランサーダートが突き刺さったまま射出の勢いで上空にもんどりうって吹き飛び、ランサーダート内部に仕込まれた信管が起動して内部から起爆。イフリートは上下真つ二つになって大破炎上、残骸はポリゴンの塊へと姿を変え、消えた。

「全く、無茶苦茶な使い方をするよ……」

機体の損傷具合を確認、日本刀を無茶な姿勢で、しかも片手で振り回したことにより左腕に集中してエラーが出ている事を確認して嘆息するヤチヨだが、その表情はどこか楽しげだった。

「さあ、反撃開始と行こうかあ!!」



## Stage 2-3 ウツキー!! アイツは申年!!

「さあ、反撃開始と行こうかあ!!」

ようやく一機撃破出来た事により上がるエイジの士気。しかし、ゲームと違い部位損傷の存在するこのGBNでは先程の戦い方は向いていなかったらしく、同じ動作で片手で日本刀を振り続けた事により左腕の各関節に無視できないダメージが蓄積されている。適切な得物の振り方をしないと肉体に負担が掛かると同じく、適切な扱い方をしなかった故のダメージは同じ人型であるモビルスーツにも伝わってしまった。

「森から更に二機、三機……まだまだ来ますう!?!」

「けれど左腕は今のではほぼ使えない。さっきの戦い方は無理だよ」

「エイジが出来なくても俺達がいらあ!! ユキナちゃん!!」

「……分かってる」

左腕にスパークが走っているテストメントアストレイは日本刀を鞘に戻すと、上空から飛びかかって来たイフリート改の攻撃をミラージユコロイドで姿を消しつつ後退してかわし、トリケロSTを構え直して二連装ビームガンで牽制を加える。

両足すらも腕部になっているイフリート改は、モビルスーツの全長を遙かに超える木々の枝をまるで猿の様に腕で交互に掴んで移動し、スラスタも無しに信じられない速度で攻撃をかわすが、飛び上がったところにバックラーシールドからビームソードを発生させたソースケのヴォルテックスが待ち構える。

「ごり押ししつつたらコイツだ!! 次元霸王流ウエポン、流星螺旋剣っ!!」

左腕から発生したビームソードはやがて渦を巻き、ビームドリルを形成する。そのまま高い推進力を生かして突撃、ヒートソードをクロスさせて防御するイフリート改だが、ゲームの様にガード動作を取れば必ず防げると言う訳でもない。ソースケの流星螺旋剣はヒートソードを碎き、胴体に突き刺さった。

明滅するモノアイを他所にそのまま前進して木に叩き付け、止めと

ばかりに両肩のビームキャノンを撃ち込む。

「考えず、直感で、最速で、最短に」

牽制射撃を続けるエイジの動きを封じようと現れるイフリート改に対して余計な小手先を使う事を止めたユキナのアヴァランチブランシエが両肩のスラストユニットを全開で吹かして突撃、突き出したGNソードの切っ先が相手の反応速度よりも早く捉え、その胴体を真横から串刺しにし、切り払いながら一閃、イフリート改はポリゴンの臓物をばら撒いて爆発四散する。

「二機撃破確認!! けど、森からまだまだ反応増えてますう!!」

「どんだけいるんだよ!? ガンダム無双じゃねえんだぞ!!」

「私も……少し休憩欲しいかも……」

ダツシユに継ぐダツシユで粒子の息切れが発生するユキナ、そしてソースケも遠距離武装の残弾が底を尽き、内蔵火器は全てリチャージ待ち、エイジもランサーダートを超高速射出させて一機を撃破するが、先ほどのゼロ距離発射がいけなかったのか反動のダメージで右腕までもがスパークを起こす。

「右腕ダメージ、甚大」

「くそっ!! 腕が上がらねえ!!」

「金枠はすぐ腕が使えるなくなるジンクスでもあるのかよ!? 取りあえずこれを使い!!」

ショートを起こし、火花を散らす右腕を肩から切り離して地面に突き刺し、即席の防護壁と化したトリケロスの陰でソースケがハイパービームライフルから分解したビームハンドガンを手渡す。

その間にもどんどん増えるイフリート改の反応。それが計八機。両手両足で地面を付き、集団でまるでゴリラの様に迫ってくるその姿にはある種の恐怖があった。

「クソツタレ!! 初ミツシヨンから死んでたまるか!!」

「あわわわわ……り、離脱しましょう!! ミツシヨン放棄すれば安全圏まで離脱は可能ですよ!!」

「冗談じゃない。けど……」

「こちらは三機とも既に満身創痍。遠距離武装もエイジが持ってい



るビームハンドガンが数発分のエネルギーを残すのみ。ユキナが再ダッシュ可能になるまでには数分を要す。

8機のイフリート改はこちらの抵抗が弱まったのを確認してか、ジリジリと迫り歩く様子から一転。猛ダッシュで詰め寄り、背部に追加されていたミサイルランチャーが火を噴く。

周囲に逃げ道を塞ぐ様にして爆発が起きるミサイル、爆風で機体の姿勢が崩れ、離脱するタイミングを失う三機。

四機が一斉に飛び上がり、ヒートソードを振りかざす。このままでは、やられる。一人が気絶し、三人が諦めかけた時だった。

『アハッ』

通信にかすかに聞こえた少女の笑い声。どこか狂気じみた笑みと共に放たれた何かは地上から迫りくる四機のイフリートの中心で爆ぜた。発生した青白い爆風が、超高速で飛翔した何らかの砲弾が発生したソニックブームが、イフリート改を構成するあらゆる要素をずたずたに引き裂き、焦がし、消滅させる。爆発に巻き込まれたエイジたちはそのまま吹っ飛ばが、結果として上空から来たイフリート改の攻撃をくらう事は無かった。

「何だ今の馬鹿げた攻撃は!？」

「タダの実弾があんな破壊力を出せる訳がねえ……あの機体は、まさか!？」

ジェネレイトドラグーンのセンサーで周囲を捜査したソースケは、遠くの岩場から狙撃していたであろう機影を確認した。黄色の塗装とワンポイントの藤紫が映えるドレッドノートガンダムだ。本来ドラグーンシステムがあつたであろう箇所には複合兵装ユニットが取り付けられており、その更に背部にはMSの半身程はあろうサイズの大型ジェネレーターとMSの全長を超えかねない程の超大型多薬室砲塔が接続されている。複数接続の核動力に破壊力の全てを任せ、暴力の権化。

『はーっ、スツキリしたあ……アケノの頼みだからって休憩中に仕事先のサーバーから来てるけど、こりや想像以上に酷いわね。その子、大丈夫?』

そんな物騒な機体に乗っている人物とは思えない程明朗な声が通信に聞こえて来た。エイジは訳が分からず生返事になってしまおうが、ソースケは機体と武装を見てデジタル版「美少女事典 著ソースケ」を検索し、一瞬でその人物を当てて見せた。

「あれは……その美貌から読者モデルもこなす『核の女王』<sup>ニュークリア・クイーン</sup>、アマノ キョウカ先輩の、ドレッドノート・ヴェールヌイ……!?!」

『おっ、君がアケノの言ってた情報通の子かな？ そーだよ。高等部二年生、ヴァリアント騎士団戦線、序列二位の女王のアマノ キョウカとはこのあたしのこと!! あたしは仕事あるから手伝えるのはここまでだけど、今二人がそっち向かってるから』

じゃ、あたしはこの辺で、と手をヒラヒラさせてからログアウトしたのかポリゴンとなつて消える黄色のドレッドノートガンダム。彼女が消えると同時に、入れ替わりで通信が聞こえてくる。同時に姿を現したのは、日本刀を口に咥えた我らが群れを束ねる紫銀の狼。

「遅ればせながら、参戦致しますよ」

「アケノさん!!」

「まさかここまでの事態だとはこちらも想定外でした。申し訳ありません、このような形の初ミッションを言い渡してしまうなんて、統領失格ですね」

コックピットの中で肩を竦めるアケノは、その頭部を振りイフリート改の二本同時に叩き付けられたヒートソードを機体の右側に構えた日本刀の刃で受け止める。工芸用品ともとれる繊細な刃でその様な使い方をすれば通常なら良くて刃こぼれ、でなければ刀身が折れていただろう。しかし、彼女の刀は折れる事は無く、その色を銀色から黒くさせる。そして色が変色したその直後だった、先ほどまで拮抗していたはずのヒートソードの方が斬られていくのだ。

「?!?!」

「理解できない、と言った表情ですね。この『月夜ノ羽ヶ斬』<sup>ツクヨノハバキリ</sup>はVP S装甲製、相手に応じて最適な切れ味に変化する変幻自在の刀なんですよ。つまり——」

ヒートソードを手放して何とか直撃を避けたイフリート改だった

が、次の瞬間にはそこに狼はいなかった。僅か1秒足らずの間に空中で身を捻りながら、両手両足を人型のそれに戻し、狼の頭部がバックパックに下がるとその下から烏帽子の様な大型の角型センサーを持つ一つ目のアストレイの頭部が姿を現す。この姿こそがアストレイ桜花狼、そのMSモード。

狼の口から手放された日本刀を身を捻りながら振りかざす。それを見たイフリートは脚部のヒートソードを使って防御しようとするが……

「二度目はあっても二度目はありません!!」

抜き放たれる上段一閃。その黒ずんだ刃が放つ一撃は先程と同様ヒートソードと拮抗することなく一方的にその得物を本体ごと袈裟切りに切り裂いた。爆発に怯えず息を吐き、残身。その一連の洗練された動作には美しさすら感じる。背後からもう一機のイフリート改が襲い掛かるが、上空から舞い降りた何かが巨大な得物でそれを叩き潰す。爆炎から姿を現した黒銀の機体は、機体の全長ほどある大型ランスメイスを肩に構えた。露出したフレーム形状から鉄血のオルフェンズに登場するガンダムフレームタイプの機体だと分かるが、相違点はスラスターから噴き出しているのがGN粒子だという事だ。

「全く、少し油断し過ぎじゃないか？ アケノ君」

「騎士団戦線統領である先輩の腕、信じていましたから」

「これはまた上手い事を言う……では、ガンダムテュルフィング。先輩らしく少々暴れさせて頂く!!」

バルバトス第六形態の物がベースであろう灰銀の装甲を装備し、頭部と背部に突き出た剣の様なパーツを持つ機体は、身の丈を超えんほどの大型ランスメイスを振りかざし、スラスターからGN粒子を吹かして急速接近。そのまま身軽故の機動力を生かし、質量を生かした打突と叩き付けのみで残り二機のイフリートを相手に手玉取る。鈍器を使うと言う面を除いて、その戦い方はあまりにも目の前の少女のそれに似ていた。

「GNフレーム……エイハブリアクターの代わりにGNドライブを搭載した、新機軸」

「え？ ユキナちゃんあの機体知ってんの？」

「だって、あれは……」

ユキナの言葉は途中で爆発に遮られる。信じられない膂力で振り回された大型ランスメイスのエッジが効いた石突きが、叩き裂く様な形でイフリート二体を纏めて両断していたのだ。地面に突き刺さった得物を引き抜き、再び肩に構え直すガンダムテュルフィングはこちらを一瞥する。

「自己紹介と援護が遅れて申し訳ない。僕は三年生 ヴァリアント騎士団戦線の序列一位、つまりはフォースマスターを務めているカナギ アキトだ。今回の件なんだが詳細を説明すると……」

そこで彼は、左利き仕様の純白に調整されたアヴァランチエクシアの存在に気が付いた。全身の所々に傷がついているが、見間違う筈もない純白、その白も通常の白では無く、ガンプラの塗装前に施すサーフェイスの下地故の、無機質な白。

「久しぶりだね、ユキナ」

「……気安く話しかけるな、クソ兄貴」

ユキナはアキトに伸ばされた手を払い除け、素早く展開した左腕のGNソードを振り払ってからテュルフィングの頭部目掛けて突き立てる。難なくそれを回避するアキトだが、並みの反応速度の機体では左腕が両断されていただろう。日頃は常に無表情な彼女だが、その言葉の端々には刺々しさが伝わって来た。まるで、心の底から憎み、拒むかのように。

「私は、アンタを倒すためにここにいる。それを忘れないで」

ようやく気絶から復活したシイナには、ちんぷんかんぷんの状況が繰り広げられていた。



ミハシラ学園高等部 ヴァリアント騎士団戦線 部室

「……つまり、今回の事件の原因は猿にVRゲームをやらせたらどうなるかの実験が原因だった、と」

後日、客人としてヴァリアント騎士団戦線の部室に招かれていたエイジとソースケ、そしてシイナはそのフォースマスターである空色のショートカットが特徴の気優しそうな高等部三年生生徒、カンナギアキトから今回の事件の要因について説明を受けていた。

何でも、どこぞの研究機関が猿の知能研究の実験の一環であろうことかチンパンジーにGBNをさせていたのだと言う。

騎士団戦線のメンバーの一部は合宿と称してその施設に赴き、その実験に見張り兼敵<sup>アグレッサ</sup>役として協力していたのだが、何者かが隔離サーバーにハッキングを仕掛け、学園のサーバーと接続して猿たちを放流したのだと言う。

下手に強制ログアウトすればどのような影響が出るか分かった物で無かったため、数日ほど放置されていた様だ。

「まさかあんな実験の協力を引き受けさせられるとは思っていなかったよ。サーバーをハッキングした犯人については目下調査中だ。僕の方から学校側に進言も出している」

「あの、カンナギ先輩って、もしかして……」

「……ああ、そうだった。君達は妹と同じフォースだったね。あんな不愛想な奴だが、どうか仲良くしてやってほしい。僕と妹の問題についてはまたいずれ話そう。今日はもう時間だしね」

少し言葉に詰まった後、はぐらかすようにそう言ったアキトは壁に掛かっているジオン公国のマークが施された壁時計に目を向けた。時刻は既に五時半を回ろうとしている。これ以上話せる時間も無いので、三人はソファから立ち上がると礼をして部室を去った。

「それにしても、まさか俺達が戦っていたのが猿だったなんてなあ」

「私も驚きました。でも、お陰でポイント大量ゲットですね!!」

GBNのデバイスに表示されたランクポイントの数字を見て嬉々とした表情で喜ぶ黒縁メガネが特徴の小動物系後輩、シイナ。気弱でパニックに弱い、何回か組んだ所電子戦の才能が高い事にエイジは気づいた。しかし、MS戦闘はからつきしだったらしく、それで最近オペレーターに転向したのだと言う。

「パーツデータも貰えたしな、俺はヴォルテックスの追加装備でも考えるかね……」

「エイジ先輩は貰ったポイントで何します？　これだけのポイントなら半期分の最上級製作室の利用権利とか……」

シイナがタブレット端末で現在のポイントとそれを消費して得られる学園側から得られる援助の項目を照らし合わせる。

今回の初ミッションで得た報酬は、お詫びも含めて高難易度ミッションに匹敵しかねる程のポイントだった。援助の内容は施設の利用権の他にもパーツデータのガシヤや塗料、工具単体など、様々な物が揃っている。

「取りあえず、コイツを強化する為に使おうかな……」

前回の戦闘では思ったように動けなかった愛機、テストメントアストレイの入ったケースを見ながら、エイジはそう呟いたのだった。

この学校のガンプラバトル部は主に四つの勢力に分かれている。まず一つにアケノミハシラ。比較的自由人が多く、特にこれと言った決まりも無く大らかだが、やるときはやると言うどこかそう言った凄みのある勢力。ここだけフォースマスターが二年生だが、どうやら訳ありらしい。ガンプラの傾向は宇宙世紀からアナザーまで大体揃っている。

次に第08機甲師団。軍人氣質のあるフォースで4大勢力の中では一番規則だの義務だのの項目が多い。階級も取り扱っており、部内での上下関係は最も厳しいが、それ故に後釜の育成はしつかりと行ってくれる。宇宙世紀の前半のMSを使う部員が多い。

次に墮落園<sup>ザ・フォールン</sup>。占いだの魔女だの墮天使長だの宇宙世紀のガンダム作品ではまず聞かないような単語で溢れかえる独特の雰囲気があるフォース。その風変りな気質故か部員数は他の三部と比較すると少ないらしいが、個々の実力が相応に高いと言う少数精鋭。アナザー系や騎士ガンダムなどのSD出展作品を多く扱う。

そして、ヴァリアント騎士団戦線。4大勢力の中で最も腕利きが集うとされている集団で、部員の分け方は完全なる序列制で、上位ランカーには二つ名が授けられる風習はここが発端だと言う。序列二位の女王を除き、残りの九機は全て聖剣、魔剣の名を冠したガンダムフレームが運用されている。

ま、色々変わった連中が多いけど、退屈はしなさそうだけ。

出典

ソースケメモより一部抜粋

フォース アケノミハシラ 修練場

「改造案を、聞きたい?」

日課としてユキナとのマンツーマン指導による、アーケード操作に頼らない通常制御でのガンプラ制御の演習を行うエイジだが、演習終了後にそんな事を彼女に尋ねていた。

先程の戦闘で見事彼女に惨敗したテストメントアストレイは、データーハンガーで修理待ちの状態だ。ちなみに今回の演習でも右腕がスパークを起こしている。

「ああ、こう言うのって他人から案を聞いた方が良い物が浮かぶって言うからさ。何個かパーツデーターガシャつてのは回してみたんだけど、良い改造案が思い浮かばなくて……」

「ちよつとガシャで出たパーツ見せて……ふうん。タクティカルアームズの基礎フレームとかあるんだ」

パーツデーターガシャとはこのミハシラ学園が独自に設定、公開しているガシャで、ポイントを一定量消費して武装やパーツなどのランナーパーツを入手できる。ただし何が出るかは完全にランダムである。

エイジは自分が引き当てたパーツリストをユキナに見せると、少し考えてから一つ訊ねた。

「……ところでエイジ。何で毎回すぐ腕が駄目になるか分かってる？」

「え？ いや、うーん……」

「君は敵の攻撃を回避では無く、全部トリケロスで受け切ろうとするでしょ？ だから集中的に負担が行ってしまうんだよ」

「そこはもつとステとかフワジャンで回避しても良いんだぜ？ あるいはミラコロで姿くますとかさ」

悩んでいたエイジに声を掛けたのは、何度か共に搭乗した事のある金髪のエルダイバーの少女ヤチヨと、ソースケだった。

どうやら彼も彼で学園側から言い渡されたミッションをクリアしていたらしく、隣のハンガーにはヴォルテックスガンダムが寝かされている。

アストレイは唯でさえ防御力が低めに部類される機体である。それを機体重量から来るフットワークの軽さによる高い機動力こそが



持ち味だと言うのに、エイジは防御を重点に置く戦闘スタイルだった故に相性の悪さが出てしまったのだ。

「とは言え、いきなり戦闘スタイルを変えろと言うのも無理な話かもしれない。僕ならこうするかな」

ヤチヨが複数あるパーツデータのの中から一部のパーツを選択し、更に別で呼び出したゴールドフレーム天自体のデータからマガノイクタチとトリケロス改を拝借、それらを組み合わせでデータハンガーで寝かされているテストAMENTアストレイに被せていく。新規で彼女が設計した部分には靄がかかっているが、大まかな全体像は何となく見えた。

「すげえ、エルダイバーってこんな事も出来るのか……?」

「アケノのガンプラ作りを隣で見てたら覚えただけだよ。汎用性と防御力を重点にしたいならこんな感じかな。他にリクエストがあるなら組み替えてみるけど……」

「いや、これで行こう。コマンドの割り振りも何となく想像が付きやすいしさ」

エイジは仮初だが新たな武装を身に纏った愛機を見て興奮すると、すぐさま彼女らにお礼を告げてからログアウトしてガンプラ制作に取り掛かるのであった。



ミハシラ学園 ガンプラ制作室

「エイジ先輩、こっちのパーツヤスリがけ終わりました」

「肉抜き穴の埋め込みはもうすぐ終わるぜ。塗料はどうする?」

「ああ、アケノさんに貰ったテストAMENTの塗料データ有るからそいつと同じにしてくれ」

「…… (ポリポリ)」

「作業の手を止めるんじえねえぞ……」

前回入手したポイントで半期分のガンプラ制作室利用の権利を勝ち取ったエイジたちは、ギャアギャアと慣れない共同作業に追われていた。ちなみに他に部員はいないのでここまで騒いでも平気で

ある。ヤスリがけ担当のシイナ曰く、『せつかくチームで組むことが多いんですし、オペレーターだけでなく先輩たちをサポートしたいです』と、何かと世話を焼いてくれた故の行動だった。ちなみに彼女もここ最近自分に合った新型を作ろうとしており、その案は既にエイジやソースケから貰っている。机の上にはトリケロス改と、専用バックパック、そして可変型の大剣、タクティカルアームズの基部が転がっていた。エイジのテストメントの改良は今回は主に武装の追加だけなのでそれほど時間は掛からなさそうだ。

とは言え、シイナの新型の手伝いもあるので、これだけで終わりでは無い。むしろそっちの方が本番まである。

新たな愛機の完成と、自機の改良を急がせるべく、エイジたちは数日ほど時間ギリギリまで校舎で粘っていた。



GBN内 ミハシラ学園用コロニー・サーバー フォース アケノ  
ミハシラ領地 天守閣

「さて、皆さまごきげんよう。アケノミハシラ代表、ミカガミ アケノです。この度、第08機甲師団との試合が決まりました。内容は5対52による総力戦、詳細ルールに関してはまた後程メールにて送付いたします。では、我々のフォースから出場するメンバーを発表しましょう」

部員総勢150名前後を誇るフォース、アケノミハシラ。その統領であるアケノは全員を天守閣に集めると、大体的にスクリーンで翌日に控えた大規模戦闘のマップとお知らせを表示していた。

場所は通称「テキコロ」と呼ばれる大規模戦闘用に調整されたテキサスコロニーで、マップの限界値が1VS1用のフィールドなどと比較すると非常に広いのが特徴だ。所謂陣地取り合戦であり、中継地点を確保しつつ敵のMSを撃破したり、本拠地にダメージを与えたりするとゲージが減少していく。それらを削り切るか、制限時間到達時により多くのゲージを残している方が勝者となる。

アケノが次々に作戦に連れて行くメンバー、より正確にはその小隊

単位を告げていく。彼女の手元に記された巻物には小隊の使う機体名も書かれているのだが、とある小隊の機体構成が変わっている事に気が付き、その口元を僅かに歪める。

「……以上で、今回の作戦に参加するメンバーの発表を終わります。各員はガンプラのメンテナンスを怠らないように」

その言葉を皮切りに照明が付き、部屋が明るくなる。時間はまだあるので部員は各々ミッションを受けたり、ログアウトして現実でガンプラの整備をに行くものなど多岐に渡る。

そんな中、腕試しに通常サーバーへと向かおうとする一行が申請を送って来た。

「新たな力、存分に振るって来なさいな」

アケノはそう呟くと、了承の判を押すのであった。



GBN 通常サーバー ギガフロート

空へと物資や人を乗せて打ち上げるマスドライバートと、それを支える人工島。そこに襲撃を掛ける三機の機影が見えた。

自立飛行できる中では最も速度の出るユキナのアヴァランチ・ブランシェが先行し、守備部隊のストライクダガーを左利き用GNソードで切り刻む。

ソースケのヴォルテックスはハイパービームライフルをジェネレイトドラグーンの形成したプラフスキーパワーゲートに向けて照射。固定砲台などの建造物を焼き払うと同時にミサイルを発射する。

同時に基地側がECMジャマーを起動させたのか、ミサイルが空中でコントロールを失いかけた、が

「私の出番ですね……っ!!」

二人の陽動を仕掛けて出来た隙に海中から上陸していたのは、黒いアツガイだった。とは言え、サンダーボルトに登場する機体がベースなのか機体サイズは一回り小さく、腕や背部には多種多様な装備が搭

載されている。前線に出る事を苦手としたシイナが、生き残りつつサポートする為に最低限の自衛装備と高性能電子機器を満載した、久方ぶりの自分の機体、その名も

「シイナツガイの底力、見せちゃいますから!!」

左腕のレーダーポッドが開き、背部装備の一部が稼働してグラウンドソナーを打ち込み、機体を固定させる。その瞬間にコックピットに出現する多種多様のコントロール。シイナは深呼吸してから「アイハブコントロール」と呟くと、目にも止まらぬ速度でコマンドを入力すると、コントロールを失っていたソースケの放ったミサイルの制御が一瞬にして回復し、次々と守備隊や砲台を破壊していく。

「流石に誘導切り付与は無いか……」

「……?」

「いや、こつちの話。それよりも、エイジの奴は……」

物陰に隠れて左腕のレーダーを展開し、近づく相手を右腕に接続されたマシンガンと炎放射器、ミサイルランチャーの複合兵装で迎撃しているシイナを、上空で敵弾を回避しながら見届けるソースケは、センサーを巡らせて姿を消したままターゲットへ向かっているはずのエイジの姿を探す。

その次の瞬間だった。最奥部で待ち構えていたレッドフレーム改の足元にどこからか射出された1本の槍が突き刺さり、爆発を起す。

「流石に誘導には期待できないかっ!!」

不意打ちを外したエイジはミラーージュコロイドを解除し、その姿を現す。その腕には今までには無かった大型の武装が握られていた。ベースこそブルーフレームの持つタクティカルアームズⅡの様だが、刃とウイングを兼ねるパーツがマガノイクタチその物になっており、ガトリングガンでは無くレールバズーカを改造した電磁加速投射砲の四角い砲身が覗いている。

外したと分かるとタクティカルアームズを変形させてバックパックに装着、入れ替わりで腰部後方にマウントされていたトリケロストをマウントし直す。

(確かに俺の戦闘スタイルはガード多用型、けどアストレイにその戦い方は合わない。それでも!!)

アローフォームで構えたレッドフレーム改の曲がる狙撃。こちらに向かってくるのが分かっているのでそれを真正面から左腕のトリケロスで受け止める。形状こそゴルドフレーム天が装備しているトリケロス改と全く同じだが、右腕用の物を多少調整して左腕で使えるようにした故に上下反転しているが、それ故に腕を振り上げただけで刃が敵を向く構造になっている。

左腕のトリケロスから発生させたビームサーベルで飛び込み切り、トリケロスTによる抜き手と連続攻撃を浴びせ、更にサマーソルトで蹴り飛ばすが、ソードモードに変えたタクティカルアームズを盾にされて防がれた挙句、相手は刃を展開したまま背部に装備し直して構える。

「マガノイクタチは、こっちにもあるんだよ!!」

ゲームと違い視覚化されないレッドフレーム改のマガノイクタチのエネルギー波、しかし、エイジは再びタクティカルアームズを抜刀するとソードモードで展開、更に相手と同じく刃を開き、鉤爪状になっている先端がレッドフレーム改の胴体を捉える。

「いくら強化されていようが、直接吸収には勝てないだろ!!」

刀身に走る黄金色のスパーク。それがレッドフレーム改に伝播すると、一瞬にして対象のエネルギーを奪い、ソード内部の増設バッテリーコンデンサに蓄積される。エネルギーを吸い尽くされ、沈黙するレッドフレーム改。エイジは止めとばかりにゼロ距離でレールバズーカを打ち込み、機体を大破させた。

「いけるぜこの新装備!! 明日は絶対勝とうぜ!!」

「「お〜」」

高らかにタクティカルアームズ禍<sup>マガツ</sup>を構えるエイジに、チームメイトの声が続いた直後、ミッションコンプリートの表示が響き渡るのだった。